



新着図書の紹介

人権センターでは人権に関する図書を取り揃えています。

「人権」は日々の生活の中でとても身近で大切なものです。まだまだ残暑厳しい毎日で、秋の虫の音が待ち遠しい季節となりました。身近で大切なことを見つめなおす時間に読書をしてみてはいかがでしょうか。図書は一回に5冊まで、2週間借りることができます。直接人権センターにお越しいただくか、お電話・FAX・メールにてお申込みください。

『こころの科学』に連載した「つながる気持ちはどこへ行く？
思春期の生きづらさと SNS」を加筆・修正した1冊です。

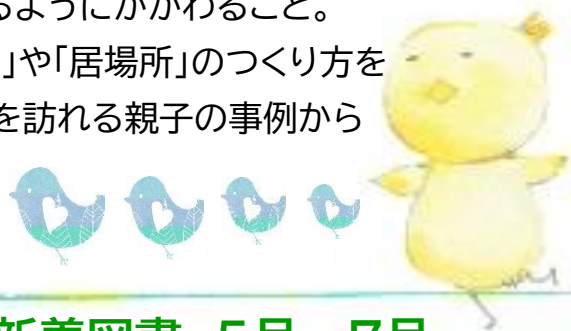
『思春期の「つながる気持ち」はどこへ行く？』

(I-4-167 著者 関 正樹 出版社 日本評論社)

子どもにとって、安心して誰かとつながることができる居場所は、学校や家庭くらいであることがほとんどです。友だち関係や「自分らしさ」などをめぐる不安や葛藤を抱え、学校に行きづらくなってしまった子どもたちや、思春期を取り巻く変化につまづいた子どもたちが、SNS やオンラインなどの世界につながりを求めることは珍しくありません。

大人にとって大切なのは、「それは危ない」と警鐘を鳴らすのではなく、子どもたちが「安心」や「居場所」を感じられるようにかかわること。

そんな「安心」や「居場所」のつくり方を児童精神科を訪れる親子の事例から考えます。



我が子がいじめの当事者と知ったらあなたは どうしますか？

『娘がいじめをしていました』

(I-5-11 著者 しろやぎ 秋吾 出版社 KADOKAWA)

中学時代にいじめられた経験を持つ赤木加奈子はある日、小学5年生の娘・愛が同級生の馬場小春をいじめていることを知り、家族で馬場家に謝罪に向かう。

加奈子たちの謝罪はその場では受け入れてもらえたものの、小春はその後、不登校になってしまう。小春の母・千春は苦しむ娘を見て知り合いに相談するが、SNS 上での匿名の告発をきっかけに、思いもよらない事態へと発展してしまうのだった――。

我が子への不信感、夫との意見の相違、SNS で巻き起こる炎上…様々な問題に翻弄される二つの家族。自分の子供がいじめの当事者と知った時、「正しい対応」とは果たして何なのか？

いじめ問題を加害者家族、被害者家族双方の視点から描く、意欲的セミフィクション。

—KADOKAWA HP引用—



新着図書 5月～7月

入荷月	書 名	著者名等	出版社等	分類番号		
5月	思春期の「つながる気持ち」はどこへ行く？ 学校に行きづらい子どもとネット・ゲーム・SNS	関 正樹	日本評論社	I4	-	167
6月	娘がいじめをしていました	しろやぎ秋吾	KADOKAWA	I5	-	11
6月	(多様化する人材と雇用に対応する) ジェンダーフリーの労務管理	小岩 広宣	日本実業出版社	J4	-	19
7月	木の上の軍隊 (小説)	平 一紘	宝島社文庫	J1	-	150
7月	父と僕の終わらない歌 (小説)	三嶋 龍朗	講談社文庫	H	-	67
7月	ルーベンです、私はどこで生きればよいのでしょうか？	小田川 綾音	西田書店	B	-	89